

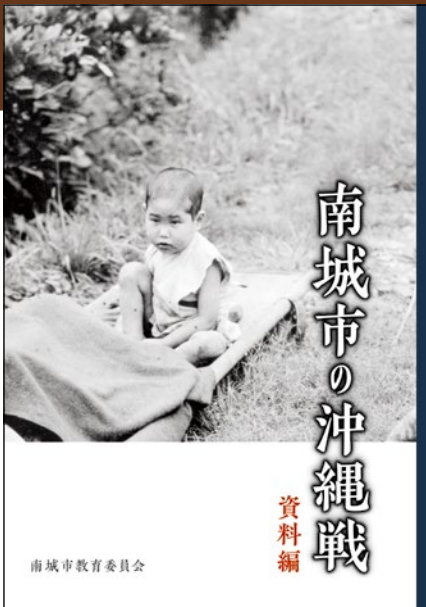
／ なんじいと学ぶ  ／

南城市の沖縄戦



このリーフレットは、『^{なんじょうし}南城市の^{おきなわせん}沖縄戦 ^{しりょうへん}資料編』・

『^{なんじょうし}南城市の^{おきなわせん}沖縄戦 ^{しょうげんへん}証言編 一大里一』 ^{おおざと}をもとにつくられています。



^{なんじょうし}南城市の^{おきなわせん}沖縄戦 ^{しりょうへん}資料編

2020年（令和2）3月に刊行した南城市の沖縄戦に関する本です。これまで、沖縄戦の本は主に住民の体験を記録する手法で進められてきました。しかし戦後75年が経過し、体験者たちも旅立たれていく中で計画されたのが史料を中心とするこの本です。このリーフレットの内容は主に『南城市の沖縄戦 資料編』を元に書かれています。2021年（令和3）3月には一般販売を開始します。価格は4,000円で、南城市役所2階の文化課で販売しています。

^{なんじょうし}南城市の^{おきなわせん}沖縄戦 ^{しょうげんへん}証言編 一大里一



南城市では四町村の^{がつべい}合併前に、『^{ちねんそんし}知念村史 第三巻 戦争体験記』（1994年）、『^{さしきちやうし}佐敷町史 4 戦争』（1999年）、『^{たまぐすくそんし}玉城村史 第6巻 戦時記録編』（2004年）を刊行していましたが、大里地域では1987年に大里村役場企画課から『私の戦争体験記』という小冊子が発刊されているだけでした。そこでこの本では、2008年から2020年にかけて大里地域出身者に行われた聞き取り調査の成果を中心にまとめることとなりました。

第一部では、**79人**の大里地域出身者の沖縄戦の証言を、第二部では資料編に掲載することができなかった南城市域出身者の^{かいころうく}回顧録を主に掲載しています。第三部では、『私の戦争体験記』を転載しています。令和3年度中に一般販売を予定しています。

^{おきなわせん}沖縄戦でたくさんの人が亡くなったけど、^{なんじょうし}その時南城市はどうだったんだろうなん？ 今日なんじいと一緒になんじょうし南城市の沖縄戦について勉強しようなん！



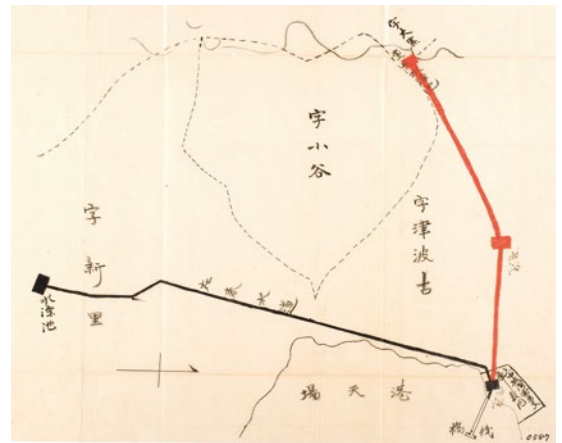


だんだん戦時色が強くなっていく日常

佐敷にあった海軍の施設

1895年(明治28)、日本海軍の軍艦への水や物資の補給基地として、中城湾需品支庫が現在の佐敷字津波古に建設されました。艦船に供給する水の水源は字新里にあり、そこから水道を敷設していました。しかし1917年(大正6)、平良亀助佐敷村長から海軍大臣に、津波古住民の飲料水確保のため水源を変更し、水道鉄管を移転したいという願いがなされます。新しい水源は字大里の「クニシ川」で、付属図面をみると字津波古に水道管を敷設したことがわかります。

中城湾需品支庫は大正・昭和期になると実質的な役割を終えたものの、来航する艦船への給水は引き続き行われていたと思われます。



「佐第一二四号 敷設水道鉄管移転ノ儀ニ付願 付属図面」〔大正八年 公文備考 土木二十七止 巻百六〕(防衛研究所所蔵)



大日本国防婦人会の集合写真(新里公民館所蔵)

銃後の村民生活

1942年(昭和17)、「大日本婦人会」が結成されました。会員は「日本婦人」で、既婚者は年齢関係なく、満20歳以上のすべての女性が参加しなければならない、強制力を伴った組織でした。沖縄県内には64支部、会員は12万人余りだったそうです。男性たちが変わって労働力の穴埋めを行い、さらに出征兵士の送迎や傷痍軍人・遺家族の訪問、慰問袋づくり、国民貯蓄、兵器を作るための鉄くず回収運動など、一連の国策への協力を惜しみなく進めていきました。

御嶽を神社に

1879年(明治12)の廃琉置県以降、沖縄県民に国家意識を浸透させるために皇民化政策が実施され、その一環として国家神道を定着させるために地域の拝所や御嶽が神社化されていきました。1943年(昭和18)には、斎場御嶽も県社斎場御嶽神社となることが決定されました。この鳥瞰図は、斎場御嶽の「神社化」計画に際して作成されたそうです。しかし戦時中の社会情勢の急変により、斎場神社の建立は実現されませんでした。



〔村社計画鳥瞰図〕(南城市教育委員会所蔵)

世界遺産の斎場御嶽が神社になっていたかもしれないなんてびっくりだなん!



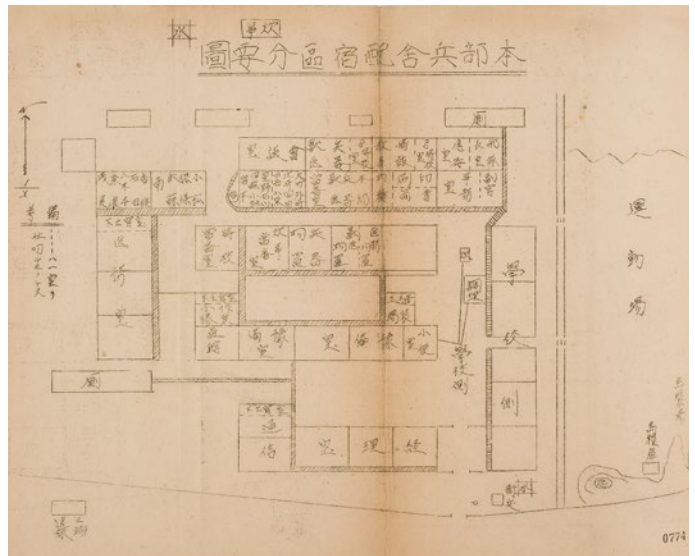
がっこう べんきょう 学校で勉強できなくなった子どもたち

ぐんたい ほんぶ たまぐすくこくみんがっこう 軍隊の本部となった玉城国民学校

アメリカ軍の沖縄上陸が現実視されるようになった1944年(昭和19)7月以降、日本本土や外国に駐留していた部隊が続々と沖縄に転進してきました。それに伴い、学校の校舎は部隊の本部や兵舎として接收されました。

玉城国民学校(現玉城小学校)に1944年12月から翌年1月まで本部を置いた第62師団独立歩兵第15大隊の「陣中日誌」(部隊が毎日つけていた日誌)の中の校舎利用図によると、校舎内の教室が部隊長室や下士官室、兵器物置、医務室、経理室などに利用されていたこと、校門に衛兵が立っていたことなどがわかります。

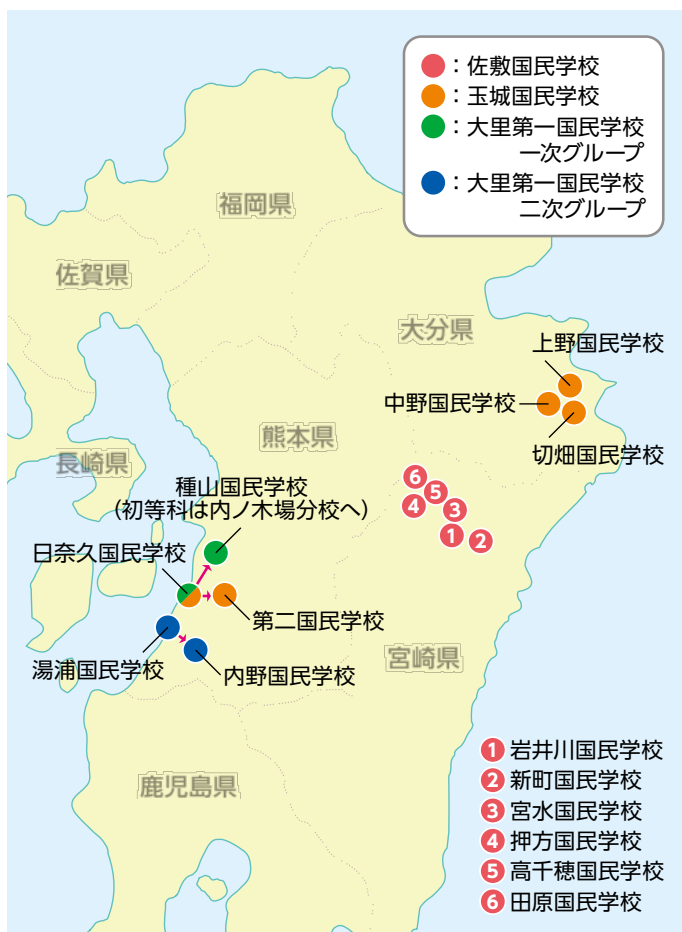
校舎を奪われた子ども達は、字の事務所(ムラヤー)や製糖場、民家などで分散して授業を受けることになりました。しかし、上級生は日本軍の陣地構築や壕掘り、勤労奉仕作業(食糧増産のための畑仕事など)に動員されることも多く、学業の時間はほとんど失われていきました。



「昭和十九年十二月二十三日 石九六日命第一六四号 別紙 本部兵舎配宿区分要図」『昭和十九年十二月一日 昭和二十年一月三十日 沖縄陣中日誌 独立歩兵第十五大隊・本部』(防衛研究所所蔵)



平和じゃないと勉強ってできないなんね



がくどう そかい 学童疎開

1944年(昭和19)7月7日、サイパン島玉砕によりアメリカ軍の沖縄上陸が現実的になったことを受け、政府は沖縄島、宮古島、石垣島、奄美大島、徳之島の五島の住民を県外と台湾へ疎開させることを閣議で緊急決定しました。最終的には沖縄県全体で、学童疎開(学校単位での子どもたちの集団疎開)で約6500人、県外疎開で約5万3000人(学童疎開者が含まれるのかは不明)、台湾疎開で約1万3000人が疎開しました。

南城市内では、佐敷、玉城、大里第一(現 大里北小学校)の三校の国民学校(当時の小学校)が九州への学童疎開を実施しました。学童と引率関係者を合わせ、佐敷国民学校からは計375人、玉城国民学校からは計170人、大里第一国民学校からは約90人(名簿が見つからないため正確な人数は不明)が疎開しました。学童たちは、1946年10月に沖縄に帰るまでの約2年間、親元を離れて九州で生活しました。その生活は、「ヤーサン(ひもじい)、ヒーサン(寒い)、シカラーサン(さびしい)」の言葉で表現されています。

家族と2年も離れるなんてさびしいだなん!



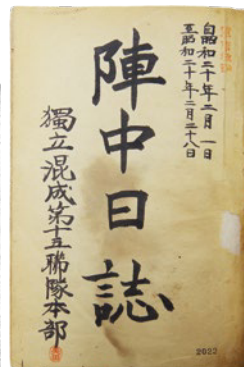
にほんぐん 日本軍がやってきた

ちゅうとん にほんぐん じゅうみん かか 駐屯した日本軍と住民の関わり ...

日本軍は毎日、「陣中日誌」と呼ばれる記録をつけていました。「陣中日誌」には、駐屯した日本軍と住民の関わりも書かれています。例えば、駐屯していた集落から野菜や芋の提供があったこと、陣地構築に小学生を動員したこと、女子青年団に看護教育を行ったこと、日本兵が足りないので青年学校の男子生徒を動員したことなどがわかります。「陣中日誌」の多くはアメリカ軍上陸後に情報漏えいを恐れて焼却処分されましたが、南城市域に配備された部隊の「陣中日誌」は戦場でアメリカ軍に拾われ、戦後に防衛省に返還されました。



「陣中日誌 自昭和二十年至昭和二十年二月二十八日 独立混成第十五連隊本部 同付属部隊」(防衛研究所所蔵)



兵士が足りない日本軍は、住民も協力させたんだなん。「根こそぎ動員」って言うらしいなん

れっしゃばくはつ 列車爆発 ..

1944年(昭和19)12月、県内に駐屯する日本軍の部隊配備の変更があり、第24師団歩兵第89連隊(山部隊)は沖縄島南部に移動することになりました。兵士や弾薬・資材の輸送に県営鉄道(軽便鉄道)を使用していたところ、12月11日午後3時30分頃、大里村の稲嶺駅付近で列車が爆発する事故が起こりました。

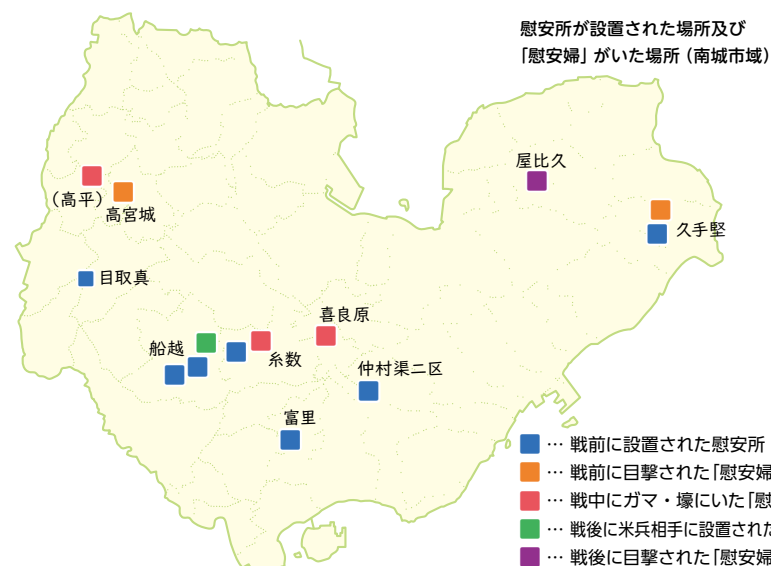
乗車していたのはほとんどが山部隊の日本兵でしたが、同乗していた女学生や男子中学生、県営鉄道職員も事故に巻き込まれています。事故現場には憲兵隊と兵隊が駆けつけて事故調査にあたっていました。民間人が事故現場に立ち入ることは許されませんでした。また、「事故のことを他言するな、口外するな」という、「箝口令」が敷かれました。そのため、亡くなった学生たちや県営鉄道職員の葬儀はどのように行われたのか、また補償があったのかについて、詳しいことはわかっていません。



軽便鉄道稲嶺駅(那覇市歴史博物館所蔵)



この列車爆発事故は、戦前の国内最大の鉄道事故だったらしいなん



いあんじょ いあんふ 慰安所・「慰安婦」

沖縄戦前後の慰安所・「慰安婦」に関する最新の研究によると、沖縄県内にはのべ143カ所の慰安所が設置されました(『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』)。

現在のところ、南城市では戦前から戦後にかけて8カ所の慰安所があったこと、その他に6カ所で「慰安婦」の目撃証言が確認されています。慰安所は日本軍の駐屯地に沿うように存在し、大半は玉城村にありました。戦後にはアメリカ兵相手の慰安所もあったようです。

アメリカ軍の上陸前夜

やんばる疎開

アメリカ軍の上陸が確実視された中で、沖縄県は1945年(昭和20)2月に中南部の住民を沖縄島北部へ疎開させることを決定しました。県は南城市域の村には金武村(現金武町及び宜野座村)を疎開地として割り当てました。疎開先では、食料品の配給もありましたが、量が少なく、生活が苦しくなって引き返す人々もいました。アメリカ軍の上陸後は、疎開地の山中の避難小屋やガマに避難したり、さらに北部へと逃げた人々もいました。

村	割り当て疎開地	疎開開始時期
おおざと 大里	あざきん あざなみざと 字金武・字並里	2月・3月
さしき 佐敷	あざなかがわ 字中川	3月上旬
ちねん 知念	あざやか あざいげい 字屋嘉・字伊芸	2月下旬頃
たまぐすく 玉城	あざかん な 字漢那	2月20日前後

「疎開」というけど、やんばるの沖縄戦にまきこまれたなん



学徒隊

沖縄県立第一中学校(現首里高校。以下、一中)四年生だった山内昌栄さん(佐敷村手登根出身1945年当時18歳)は、沖縄へのアメリカ軍上陸が目前に迫った1945年(昭和20)3月下旬、一中鉄血勤皇隊に動員されました。

この木に山内さんが彫った「君が為 何か惜しまん若桜 散って甲斐ある 命なりせば」という短歌は、日米開戦時にハワイ真珠湾を奇襲攻撃した古野繁実少佐の辞世の句で、当時の中学生が好んで口に、遺書にもよくしたためられました。

この桜の木は一中の中庭のものであるという説と、山内さんの自宅の庭のものであるという説(山内さんが父母に最後の別れを告げに自宅に戻った際、両親が不在だったため木に歌を刻みつけた)の二つがありますが、いずれも鉄血勤皇隊への動員前後のものだと考えられています。

山内さんは沖縄戦で戦死していますが、戦没時の状況は不明です。



旧・沖縄一中生・山内昌栄さんが桜の木に彫った遺詠(一中学徒隊資料展示室所蔵)と顔写真



当時は14歳から学徒兵として戦場に行っただなんて…考えられないなん





せんじょう まよ じゅうみん 戦場をさ迷う住民

こや はるこ おおざとふくはら しょうわ ねんう どうじ さい
呉屋 春子 (大里福原 昭和4年生まれ) 当時16歳



1945年(昭和20)の年明けから空襲がたびたびあり、5月中旬まで①防空壕で生活していた。だがアメリカ軍が上与那原(現 与那原町)まで接近してきたため、

②大里村大城を經由し、③玉城村親慶原にある自然ガマ(壕)に避難した。

そのうち親慶原の壕も危険になったので④前川ガンガラーに行ったが、人が多く艦砲射撃が撃ち込まれる危険な場所だったため、⑤具志頭村(現 八重瀬町)安里、⑥真壁村(現 糸満市)新垣、⑦真栄平へと避難した。

新垣・真栄平一帯では、私達は死体を避けたり踏んだりしながら逃げ回った。この世の地獄だったが、人間としての感覚が麻痺して、死体を見てもこわいという感情はなかった。祖父はけがをして歩けなくなり、親族が交代でモッコで担ぎ避難した。

その後⑧真壁に移動して畑に掘った穴に隠れていたが、戦車を先頭にアメリカ兵が自動小銃を乱射しながら近くまで接近してきたので夢中で逃げた。破傷風になっていた祖父はここで亡くなった。この頃は睡眠や食事を充分に取れず衰弱し、サトウキビをかじって飢えをしのいでいた。

私たちは⑨小波蔵を過ぎ、⑩喜屋武村に行く道路の右側にある松林の中に逃げた。6月19日、アメリカ軍の戦車が摩文仁岳を砲撃しながら糸満街道を通過した。私たちはアメリカ兵に取り囲まれて捕虜になった。

⑪糸満街道に出ると、周辺から捕虜となった住民がたくさん集まってきた。その後私たちは伊良波(現 豊見城市)、野高(現 宜野湾市)、古知屋(現 宜野座村松田)の収容所に移された。11月には玉城村船越を經由して大里村大城に移った。アメリカ軍が引き揚げたのち、福原に帰ることを許された。



アメリカ軍の沖縄戦の記録 — 「捕虜」になったあと

アメリカ軍の日報 (1945年6月2日)

沖縄戦中、アメリカ軍は200ヤード（約183メートル）四方で碁盤目の線を引き、その一区画ごとに目標地域コード（4ケタの数字とアルファベットを組み合わせたもの）を割り振った地図を使用していました。

6月2日の日報には8463Uの地点で「19時15分南に向かって移動する50人の日本兵を目標した。そのうちの半数は民間人の服を着ていたと報告された」と書かれています。



「連合軍政府によって収容された沖縄住民 1945年6月」(沖縄県公文書館所蔵)



戦場から生き延びた人たちは家に帰れたんじゃなくて、収容所に行かされたんだよね

「捕虜」になって

アメリカ軍は知念半島に進出した1945年（昭和20）6月以降、知念半島各地に民間人収容所を設置し、知念半島や南部戦線で投降した避難民を次々に収容していきました。

南城市域では6月初旬から中旬にかけて、玉城村富山、百名、仲村渠、垣花、親慶原、知念村志喜屋、山里、具志堅、知念、久手堅、安座間、知名、海野、久原、佐敷村屋比久、新里、伊原、大里村稲嶺に収容所が開設されました。人々は焼け残った家屋やアメリカ軍が設置したテントに収容されましたが、一つの家屋やテントに数世帯から数十世帯がひしめきあって暮らすありさまでした。それらに入ることができず、家畜小屋や道端で暮らさざるをえなかった人も大勢いました。

戦災孤児

玉城村の百名収容所には、戦災孤児や身寄りのない大人（おもに高齢者でしたがなかには20代の人もありました）を収容する孤児院や養老院も開設されました。百名孤児院・養老院は、1947年（昭和22）1月には他の孤児院・養老院との統合により、百名養護院（孤児院）となりました。翌年2月27日付の『うるま新報』によると、当時百名孤児院には56人の寄宿生がいたそうです。



「男子寮のベッドの端に座る百名孤児院の男児（1949年3月14日撮影）」(沖縄県公文書館所蔵)

戦争でひとりぼっちになってしまうなんて悲しいなん



せんご 「戦後」のスタート



「戦車揚陸艦 LST-1031に向かって移動する、沖縄本島の民間人。同艦によって、沖縄本島北部に運ばれた。1945年7月12日撮影」（沖縄県公文書館蔵）

の やんばるへの立ち退き

1945年（昭和20）7月11日から8月18日にかけて知念半島のいくつかの収容所にいた人々が強制的にやんばる（多くが現在の名護市である久志村）に移動させられました。

そこではマラリアが猛威を振るっており、戦場で生き残った南城市の人々も多く亡くなっていきました。証言では、「高熱でガタガタ震える」と苦しむ人々の話がたくさんでできます。

収容所で亡くなった人も
沖縄戦の犠牲者なん

しな い けんせつ べいぐん し せつ 市内に建設される米軍施設

アメリカ軍は知念半島を制圧後、佐敷村の馬天港に海軍の作戦基地司令部や船舶修理施設などを建設しました。そのほか、佐敷村では新里、小谷、津波古のバックナービル（アメリカ軍高官の住宅地）をはじめ村内各地にアメリカ軍施設が建設されたため、佐敷の人々が収容所から村に帰ることができたのは1946年（昭和21）3月に入ってからでした。ただし津波古への帰還は認められなかったため、津波古区民は屋比久などに一時収容されたのち、48年（昭和23）11月ようやく帰還を完了しました。



「沖縄本島の馬天港にある海軍作戦基地司令部。下士官用兵舎、赤十字用宿舎、食堂。1945年8月14日」（沖縄県公文書館蔵）

南城市内にも
アメリカ軍の
基地が
あったんだなん！



「知念村八代村長健在祝賀会（1949年11月8日）」（安座真区所蔵）

しゅうらく さいけん 集落の再建

やんばるや知念半島の収容所で生活していた人々は、アメリカ軍が「住民再定住計画及び方針」（各地の収容所で生活している住民を元の居住地区に再定住させる方針を示したもの）を1945年（昭和20）10月23日に発表して以降、翌年にかけて、元の居住地へと帰郷していきました。

故郷に戻った人々は、茅葺などの簡易な家を作り、野ざらしになっていた遺骨を収集し、爆弾で空いた穴を埋め、集落の再建に汗を流します。

沖縄戦前夜には開催されなくなっていた村アシビも、沖縄戦を生き残った人々、沖縄に帰ってきた人々によって再び行われるようになりました。

